インフラ整備で舞鶴の活力増大

旅行生に海路で舞鶴へ来てもらい、各々の観光地へ行くコースをつくる。まずそういうところから始めてはどうかと思います。

経済の面では、地場企業の技術力をもっと売り込む必要があります。対岸諸国に対して物を買ってくださいと、行政にもお手伝いして頂くことが大事ではないかと思いますね。昨年、日立造船は大連市と環境プラント建設の契約が取れましたが、その時大連市は、日本からたくさんの訪問客があるけれど、市の方から売り込みがあったのは舞鶴が初めてだと大変驚き、喜んでいるという話がありました。このような取り組みをこれからも継続していかなくてはいけないと思っていますね。

上西 勝己 会頭

齋藤市長

昨年は、地元企業が製造した活浄水器や地酒を大連市へ輸出するなど市もお手伝いをさせて頂きました。今、中国では水不足が大きな問題であり、当市企業の海水淡水化プラントの売り込みを官民あげて取り組んでいます。25年を経て実利ある交流が着実に進展しつつあります。経済交流の拠点として商工会議所の支所を大連に設置されたらいかがですか。

上西会頭

そのとおりで、舞鶴の技術力は世界でもトップレベルで十分売り込めると思います。例えばユニバーサルの造船技術は世界でも高く、話を聞くと、中古になった時他の会社が建造した船舶よりもプレミアがついて高く売れるということです。日本板硝子の技術についても相当高いと聞いています。その傘下にある下請け企業もそれに伴う技術を持っているわけですから、これをどんどん活用して外に向かって出ていったら良いと思います。

齋藤市長

造船業に育まれた舞鶴の機械金属関係の技術力は、ものすごく高いものがあります。これを再認識していかなくてはいけないと思います。これはすばらしい舞鶴力の１つです。

話は変わりますが、今年、東舞鶴高等学校が大連に修学旅行で行く予定です。会頭が言われたように、将来、向こうからの修学旅行生の受け入れについても考えていかなければと思いますが、このことは、友好の輪が次の世代へ繋がる大きな第一歩だと思っています。

司会

今、お２人に今年の抱負を聞かせていただきました。市長さんは、当選後初の施政方針で「舞鶴力の再生」を強調されていました。舞鶴力の再生についてお聞かせ下さい。

「舞鶴力の再生」とは

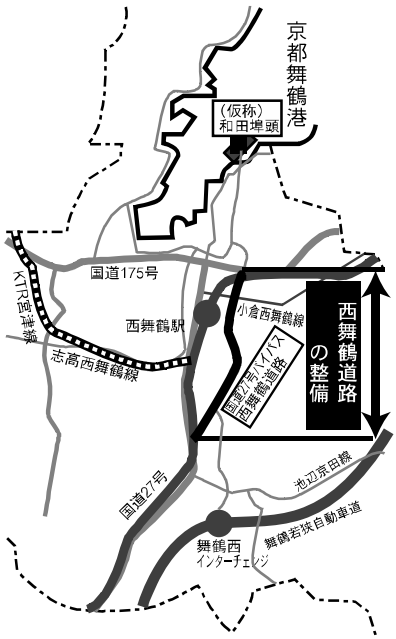
齋藤市長

舞鶴力というものを大きな視点から具体的に見ていきますと、１つは歴史を通じて見る視点、２つは地理的な側面から見る視点、そして３つ目は人づくりから見る視点に分けられると思います。

まず歴史から見ますと、昨年、ＮＨＫのテレビ番組「その時歴史が動いた」の中で引揚港の舞鶴が映り、この100数年間の流れの中で、東郷平八郎がロシアのバルチック艦隊を撃破した時に、花火を上げたり、綱引き大会を行ったり、たくさんの人が集まって勝ったことを喜ぶ舞鶴であり、第二次世界大戦後、シベリア抑留の引揚げ港として、たくさんの同胞の帰国を一生懸命、若い人からお年よりまでご苦労様でしたと言ってお迎えした舞鶴であったわけです。これは舞鶴市民の意識に大きなインパクトを与え、コントラストの際立った事件であったと思います。

次に地理的な側面から見ますと、北陸自動車道、名神に繋がる中で中部圏内も入れた形で敦賀が大きな力を持ってまいりました。舞鶴の今後を考えると、平成26年には京都縦貫道が京都に繋がって、舞鶴若狭自動車道も繋がる。インフラ整備により、初めて港の特性が最大限生かされ、人、モノ、ビジネス、観光といった多様な面で地域振興に繋がっていくものと考えます。今回、市民の皆様にもお願いしていますけれども、相当の資本を投下して27号線バイパスをやっていかなければならない。

27号線バイパスというのは、舞鶴のインフラ整備で唯一残された課題でありまして、舞鶴を通過点にして例えば港湾に繋いでいく、それによって舞鶴西インターから西港まで10分で繋がる。逆に、まちに入った10分のところから東西に行ける交流、観光から流動人口をしっかり受けていくそういう形の中で道路、どうしてもやらなくてはならない27号バイパスになってくると思います。



出典：舞鶴市都市計画マスタープラン